Osaka University Knowledge Archive

Title	情動強度尺度日本語版の作成
Author(s)	野口, 素子; 佐藤, 弥; 吉川, 左紀子
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 103-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11459
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

対人社会心理学研究, 8, 2008

情動強度尺度日本語版の作成

野口素子(京都大学教育学研究科)
佐藤　弥(京都大学霊長類研究所)
吉川左紀子(京都大学こころの未来研究センター)

情動強度とは、情動経験の典型的強度を示す個人特性である。Bachorowski & Braaten(1994)は、英語圏での研究から、情動強度を測定するための情動強度尺度(Emotional Intensity Scale: EIS)を開発した。本研究では、EIS 日本語版を作成し、日本人参加者を対象に調査を実施した。関連する他の個人特性(状態特性不安、情動的共感性、多次元共感性)の尺度を併せて調べた。EIS 全体得点、不快得点、快得点の結果、それらの相関関係および性差について、原版と同様の結果が得られた。また、項目間の信頼性は高かった。EIS 不快得点と特性不安の間、および全体得点・不快得点・快得点と情動的共感性・多次元共感性の情動関連下位尺度との間に、それぞれ正の相関が示された。こうした結果から、本研究で作成した EIS 日本語版は、情動強度を測定する尺度として有効であることが示される。

キーワード: 情動強度、特性不安、共感性

問題

情動は、われわれの日常生活や社会生活に大きな影響を及ぼしている。情動は考えや意図を伝達したり他者と協調したり、対人関係の構築や円滑なコミュニケーションの実現に役立つため、情動に関する様々な個人能力は、社会的相互作用にとって非常に重要である(Lopes, Brackett, Nezlek, Shütz, Sellin, & Salovey, 2004)。例えば、Salovey & Mayer(1990)によって提唱された情動知能(Emotional Intelligence: EI)は、自己または他者の情動を知覚したり自己の情動を調整したりする能力のことであり、一般的にも広く受け入れられている概念である。同様に、ある同じ出来事に対する情動経験の強度も個人によって異なるため、それに対する対処やその後の対人関係に影響を及ぼす重要な要因となる。

情動をどれほど強く感じやすいかという個人特性は、情動強度(Emotional intensity)として概念化されている(Larsen & Diener, 1985, 1987)。情動強度とはより正確には、個人がある情動を経験するときの典型的な強度を示す特性である(Larsen & Diener, 1987)。情動強度は、外向性や神経症傾向といった個人特性との関連も示されており(Bachorowski & Braaten, 1994)、様々なパーソナリティ特性の基盤となっている可能性が考えられる。そうした観点からも研究意義の高い心理特性であるといえるだろう。

情動強度を測定するために、いくつかの指標が開発されてきた。Larsen & Diener(1987)では、感情強度指標(Affect Intensity Measure: AIM)が開発された。調査の結果、AIM は、情動強度の個人差を測定する自己報告尺度として十分妥当であることが確認された。しかしAIMには、異なる情動強度の記述に対してその経験頻度について回答させるという形式をとっており、経験頻度を主たる反応として情動強度と頻度をあわせて測定しているという問題があった。情動の経験頻度は、情動強度の個人差だけでなく、個人がおかれた環境要因の影響も受ける。例えば、怒りの経験頻度の評価には、個人特性だけでなく、怒りが喚起されやすい外的環境におかれているか否かも影響する。そのため、情動経験の個人差を測定するには、情動頻度は分離して測定できる測度が必要となる。Bachorowski & Braaten(1994)は、AIM の改良版として、情動経験の頻度を混同することなく、情動経験の強度のみを測定する情動強度尺度(Emotional Intensity Scale: EIS)を開発した。調査の結果、情動強度尺度は十分な信頼性と妥当性を有することが示された。現状で、EIS が情動強度を主たる反応として測定する最も妥当な質問紙であると評価できる。EIS は、全体得点だけでなく、下位成分として、不快得点および快得点を算出できるよう作成されている。

現状において本邦では、情動強度を計測するための指標は導入されていない。上述のように、情動は日常生活および社会的適応において大きな影響力を持つことから、情動強度を適切に計測できる日本語指標の導入が望まれる。

本研究では、情動強度を測定する適切な日本語の指標として、EIS 日本語版を作成することを目的とした。EIS を日本語訳し、日本人参加者を対象に調査した結果を Bachorowski & Braaten(1994)と比較した。

併せて、特性不安との関係を調べることで、EIS 日本語版の妥当性も検討した。特性不安とは、不安になりやすい個人特性を指す。概念的に特性不安は、情動強度の不快成分を構成する要素の一つであると考えられる。先行研究からも、特性不安と不快情動経験の間に正の相関があることが示されている(Pollatos, Traut-Mattausch, Schroeder, & Schandry, 2007)。したがって、特性不安は、EIS 日本語版の不快得点と関連すると予想される。特性不安を計測するための標準的質問紙である状態・特性不安尺度(State-Trait Anxiety Inventory: STAI; 肥田野・福原・岩脇・曽我・Spielberger, 2000)では、特性不安と状態不安を個別に計測することができる。状態不安とは、その時点で経験している一時的な不安を指す。もし EIS 日本語版の不快得点が個人特性を反映するものであれば、特性不安とは関係するが、状態不安とは関係は示されないと予想される。

また、共感性との関連について調べ、EIS 日本語版の妥当性を検討した。多くの先行研究から、共感性の情動的側面と自己報告による快および不快な情動状態との関連が強く示唆されており、情動強度とも関係があると考えられる。例えば、Archer, Diaz-Loving, Gollwitzer, Davis, & Foushee(1981) は、Mehrabian & Epstein(1972)によって作成された情動的共感性尺度の高得点者が、より強い同情や個人的苦痛の感情を自己報告することを示した。また、Davis は、一連の研究から、Davis(1983b)により開発された多次元共感性尺度における情動に関係した下位成分が、情動強度と関係することを示唆している。多次元共感性尺度は、個人的苦悩、共感的配慮、空想、視点取得の4つの下位成分からなり、このうち前3者が情動に関連するとされる(Davis, 1983b)。Davis(1983a)は、多次元共感性尺度における共感的配慮項目の得点が、同情的な感情や個人的苦痛の感情と関連する一方、視点取得項目の得点は同情、不安どちらの感情にも関係しないことを明らかにした。Davis(1987)においても、共感的配慮項目の高得点者は、友好感情や敵意、不安、抑うつ感情を、低得点者よりも強く報告することが示された。これらの知見から、情動的共感性尺度および多次元共感性尺度の情動関連下位成分は、EIS 日本語版の不快得点、快得点のどちらとも関連があると予想される。

方法

参加者

大学生・大学院生 55 名(平均 20.3 歳、*SD* = 2.2)が参加した。男性 25 名、女性 30 名であった。調査は 2 回に分けて行われた。第 1 回調査では、男性 10 名、女性 14 名の計 24 名(平均 19.5 歳、*SD* = 1.4)を対象とした。第 2 回調査は、1 回目とは異なる参加者で、男性 15 名、女性 16 名の計 31 名(平均 21.0 歳、*SD* = 2.6)を対象とした。

質問紙

EIS 日本語版 Bachorowski & Braaten(1994)によって作成された各質問項目について、第 1 著者および共著者である大学教員 2 名(うち 1 名は英語圏への留学経験あり)で邦訳を行った。原文の意味を損なわず、かつ自然な日本語になるよう翻訳された。また、バックトランスレーションを行い、原文の意味を内容的に変えていないことを確認した。

作成された質問紙は、快情動経験に関する項目が 14 項目、不快情動経験に関する項目が 16 項目、計 30 項目からなり、それぞれ 5 段階評定であった。各項目と選択肢を付録に示す。

STAI 日本人用に作成された新版 STAI(肥田野他, 2000)を使用した。STAI とは、様々な場面における不安知覚の個人差を測定する特性不安と、不安を喚起する事象に対する一過性の状況反応である状態不安を測定する尺度であった。それぞれ 20 項目、計 40 項目からなり、ともに 4 件法で測定された(特性不安は、1: ほとんどない～4: ほとんどいつも、状態不安は、1: 全くあてはまらない～4: 非常によくあてはまる)。

多次元共感性尺度 Davis(1983b)が作成した尺度の日本語版(桜井, 1988)を使用した。この尺度は、共感性について、視点取得(認知的側面)、空想、共感的配慮、個人的苦悩(以上は情動的側面)の 4 つの下位成分から多次元的に捉えたものであった。各成分につき 7 項目、計 28 項目について、5 件法で回答するものであった(1: 全くあてはまらない～5 :よくあてはまる)。

情動的共感性尺度 Mehrabian & Epstein(1972)が作成した尺度の日本語版(加藤・高木, 1980)を使用した。これは、共感性の情動反応的側面を強調した尺度であった。計 33 項目からなり、9 件法であった(-4: 全く違うと思う～4: 全くそうだと思う)。

手続き

1 回目の調査は、個別で行われた。EIS と STAI が測定された。2 回目の調査は、1～4 名の小集団で実施された。EIS と多次元共感性尺度、情動的共感性尺度が測定された。両調査ともに、尺度の順序はカウンターバランスがとられた。質問紙に含まれた教示にしたがって、各参加者の自由なペースで行われた。

結果

EIS 日本語版の全体得点、快得点、不快得点

EIS 日本語版の結果については、予備的解析により第1回調査と第 2 回調査の間に統計的に有意な差が示されなかったため、これらの結果をあわせて報告する。EIS 日本語版の全体得点、快得点、不快得点それぞれにおける合計得点と *SD* を、参加者全体および性別ごとに Table 1 に示す。併せて、Bachorowski & Braaten(1994)における結果を示す。各合計得点は、Bachorowski & Braaten(1994)と大きな隔たりはなかった。性差について、全体得点、快得点、不快得点ごとに t 検定を行ったところ、不快得点のみで、女性の方が男性よりも有意に得点が高かった(t (53) = 2.86, p < .01)。なお、Bachorowski & Braaten (1994)では、項目全体の得点において、女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。

EIS 日本語版の相関構造

EIS 日本語版の全体得点、快得点、不快得点それぞれ間の相関係数を、Table 2 に示す。快得点と不快得点の間に、有意な正の相関が示された(r = .61, p < .001)。Bachorowski & Braaten(1994)においても、同様に正の相関が有意であった(r = .52)。

EIS 日本語版の信頼性

信頼性係数を算出したところ、項目全体の α 係数は.81と、高い信頼係数が得られた。快得点の α 係数は.78、不快得点の α 係数は.65 であった。なお、Bachorowski & Braaten(1994)の項目全体の α 係数は.90 であった。

Table 1 EISの全体得点、快得点、不快得点における、参加者全体および性別の平均得点

	本研究			Bachorowski & Braaten (1994)		
	全体得点	快得点	不快得点	全体得点	快得点	不快得点
参加者全体						
平均	99.82	47.38	52.44	105.66	51.68	53.98
SD	11.95	7.29	6.45	13.81	6.56	9.20
男性						
平均	96.88	47.00	49.88	98.25	50.00	48.25
SD	13.10	7.75	6.52	12.93	6.93	8.56
女性						
平均	102.27	47.70	54.57	110.30	52.73	57.56
SD	10.50	7.00	5.65	12.32	6.13	7.69

Table 2 EISの各得点とSTAI、情動的共感性、多次元共感性との相関関係

	EIS全体得点	快得点	不快得点
EIS全体得点	1.00		
快得点	0.87 **	1.00	
不快得点	0.92 **	0.61 **	1.00
	EISとSTAI (n = 24)		
STAI特性不安	0.47 *	0.30	0.54 **
STAI状態不安	0.02	0.04	0.20
	EISと共感性 (n = 31)		
情動的共感性	0.58 **	0.62 **	0.44 **
多次元共感性			
視点取得	0.03	0.21	−0.12
空想	0.52 **	0.50 **	0.44 **
共感的配慮	0.42 **	0.53 **	0.25
個人的苦悩	0.60 **	0.39 *	0.65 **

**p < .01, *p < .05.

EIS 日本語版と STAI および共感性との関係

STAI および 2 つの共感性尺度の得点と、EIS 日本語版の全体得点、快得点、不快得点それぞれとのピアソンの相関係数を算出した。結果を Table 2 に示す。

STAI との相関の検討の結果、特性不安においてのみ、全体得点、不快得点との正の相関が有意であった(全体得点, $r = .46$, $p < .05$, 不快得点, $r = .54$, $p < .01$)。

情動的共感性尺度との相関の検討の結果、全体得点、快得点、不快得点の各得点と有意な正の相関がみられた(全体得点, $r = .59$, 快得点, $r = .62$, 不快得点, $r = .50$, $ps < .01$)。

多次元共感性尺度の各下位成分との相関の検討の結果、情動的側面(空想、個人的苦悩、共感的配慮)と正の相関がみられた。空想、個人的苦悩とは、全体得点、快得点、不快得点のいずれの得点とも正の相関が有意であった(空想では、全体得点, $r = .52$, 快得点, $r = .50$, 不快得点, $r = .44$, $ps < .01$, 個人的苦悩では、全体得点, $r = .60$, $p < .01$, 快得点, $r = .39$, $p < .05$, 不快得点, $r = .65$, $p < .01$)。共感的配慮に関しては、全体得点と快得点とに有意な正の相関が確認された(全体得点, $r = .42$, 快得点, $r = .53$, $ps < .01$)。

考察

本研究では、Bachorowski & Braaten(1994)が開発した EIS の日本語版を作成した。日本人参加者を対象としてデータを収集し、Bachorowski & Braaten(1994)と比較した。併せて不安および共感性の個人差との関係を調べ、尺度の妥当性を検討した。

Bachorowski & Braaten(1994)の結果との比較を行ったところ、EIS 日本語版の全体得点、快得点、不快得点それぞれにおいて、Bachorowski & Braaten(1994)とほぼ同程度あり、 *SD* も比較的小さかった。EIS 日本語版により、EIS と同様、適切に情動強度が計測されていることが示唆される。性差に関して、本研究では、不快得点においてのみ、女性の方が男性よりも高くなったが、Bachorowski & Braaten(1994)では、全体得点において女性の方が男性よりも高くなった。これは、Bachorowski & Braaten(1994)における性差をみても、特に不快得点における差が一因となっており、その点では大きく乖離しているわけではない。また、Bachorowski & Braaten(1994)同様、快得点と不快得点の間に正の相関が確認されており、2 つの因子が別次元ではないことを改めて示唆する結果となっている。快、不快と分けるのではなく単一因子構造である可能性も考えられるが、AIM の先行研究において多因子構造を示唆する結果も得られており(Cooper & McConville, 1993; McConville & Cooper, 1995)、EIS の因子構造については今後の検討課題の一つである。尺度の信頼性に関しては、Bachorowski & Braaten(1994)より若干低いものの、信頼性の程度としては十分使用可能な尺度であると評価される。

STAI と EIS 日本語版との関連性を調べた結果、特性不安のみ全体得点、不快得点との正の相関が確認された。様々な場面における不安を感じやすい程度と不快を感じる強度に関連があるのは当然の結果であり、特性不安と不快情動経験との関連を示した Pollatos et al.(2007)とも一致する。なお、全体得点における相関は、不快得点との相関に起因すると考えられる。また、一時的な情動経験を反映する状態不安とは有意な関係を示さなかったことは、EIS 日本語版が個人特性を計測するという妥当性を保証する結果と言える。

共感性と EIS 日本語版との関連性を調べた結果、情動的共感性尺度および、多次元的共感性尺度の空想、個人的苦悩、共感的配慮の 3 下位成分と、EIS 尺度の各得点に正の相関が確認された。つまり、共感性における情動的側面と正の相関があったということである。これは、共感性の情動的側面が様々な情動的反応に影響を与えるという Archer et al.(1981)や Davis(1983a)の見解と一致する結果である。なお、共感的配慮においてのみ、不快得点との相関がみられなかった。共感的配慮は空想、個人的苦悩の 2 成分とは異なり、向社会的な行動と関連すると言われている(Maner & Gailliot, 2007)。そのため、不快情動経験とは関連しにくかった可能性が考えられる。以上の結果より、EIS 日本語版の妥当性が認められたと言える。

まとめると、本研究において作成された EIS 日本語版は、日本人を対象に情動強度を測定するうえで、十分な信頼性と妥当性を有するものと評価できる。ただ、いくつか残された課題もある。まず、本研究では再テスト信頼性を検討していない。今後の研究において、同一参加者を対象に複数回調査を実施し、尺度の安定性を確認することが望まれる。また、妥当性の確認として、弁別的証拠も望まれる。例えば、情動経験に伴う情動表出の個人差を測定する情動表出性(Gross & John, 1995)との違いを検討することなどが考えられる。また本研究ではサンプル数が 50 人強と Bachorowski & Braaten(1994)の 100 人強に比べて少なく、サンプル対象が大学生のみであった。今後、高齢者や幼児といった幅広い年齢層を含む多くのサンプルについて調査し、外的妥当性を検討する必要があるだろう。

EIS 日本語版を用いて測定される個人ごとの情動強度は、社会的相互作用や対人コミュニケーションの円滑さなど、個人の様々な社会行動と関連する特性であると考えられる。不安特性や共感性だけでなく、他の個人特性や行動反応との関連について検討することにより、情動強度の

個人差がもつ社会的な重要性が示されることが期待される。

引用文献

Archer, R. L., Diaz-Loving, R., Gollwitzer, P. M., Davis, M. H., & Foushee, H. C. (1981). The role of dispositional empathy and social evalution in the empathic mediation of Helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 786-796.

Bachorowski, J. A., & Braaten, E. B. (1994). Emotional intensity: Measurement and theoretical implications. *Personality and Individual Differences*, 17, 191-199.

Cooper, C., & McConville, C. (1993). Affect intensity: Factor or artifact? *Personality and Individual Differences*, 14, 135-143.

Davis, M. H. (1983a). The effects of dispositional empathy on emotional reactions and helping: A multidimensional approach. *Journal of Personality*, 51, 167-184.

Davis, M. H. (1983b). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.

Davis, M. H., Hull, J. G., Young, R. D., & Warren, G. G. (1987). Emotion reactions to dramatic film stimuli: The influence of cognitive and emotional empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 126-133.

Gross, J. J., & John, O. P. (1995). Facets of emotional expressivity: Three self-report factors and their correlates. *Personality and Individual Differences*, 19, 555-568.

肥田野 直・福原眞知子・岩脇三良・曽我洋子・Spielberger, C. D. (2000). 新版 STAI マニュアル 実務教育出版

加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の性質 筑波大学心理学研究, 20, 33-42.

Larsen, R. J., & Diener, E. (1985). A multitrait-multimethod examination of affect structure: Hedonic level and emotional intensity. *Personality and Individual Differences*, 6, 631-636.

Larsen, R. J., & Diener, E. (1987). Affect intensity as an individual difference characteristic: A review. *Journal of Research in Personality*, 21, 1-39.

Lopes, P. N., Brackett, M. A., Nezlek, J. B., Shütz, A., Sellin, I., & Salovey, P. (2004). Emotional intelligence and social interaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 1018-1034.

Maner, J., & Gailliot, M. T. (2007). Altruism and egoism: Prosocial motivations for helping depend on relationship context. *European Journal of Social Psychology*, 37, 347-358.

McConville, C., & Cooper, C. (1995). Is emotional intensity a general construct? *Personality and Individual Differences*, 18, 425-427.

Mehrabian, A., & Epstein, N. (1972). A measure of emotional empathy. *Journal of Personality,* 40, 525-543.

Pollatos, O., Traut-Mattausch, E., Schroeder, H., & Schandry, R. (2007). Interoceptive awareness mediates the relationship between anxiety and the intensity of unpleasant feelings. *Journal of Anxiety Disorders*, 21, 931-943.

桜井茂男 (1988). 大学生における共感性と援助行動の関係 ―多次元共感測定尺度を用いて― 奈良教育大学紀要, 37, 149-153.

Salovey, P., & Mayer, J. D. (1990). Emotional intelligence. *Imagination, Cognition, and Personality*, 9, 185-211.

付録

1. 誰かがほめてくれたとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少しうれしい
   3. うれしい
   4. とてもうれしい
   5. 有頂天になるほど非常にうれしい
2. ひどいことが起こるかもしれないと考えたとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し心配だ
   3. 心配だ
   4. とても心配だ
   5. 他のことが何も考えられないほど非常に心配だ
3. うれしいとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少しうれしい
   3. うれしい
   4. とてもうれしい
   5. とびあがるほど非常にうれしい
4. 子どもが苦しんでいるのを見たとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し動転する
   3. 動転する
   4. とても動転する
   5. 気分が悪くなるほど非常に動転する
5. とても好きな人がお茶に誘ってくれたとき、私は
   1. 有頂天になるほど非常にうれしい
   2. とてもうれしい
   3. うれしい
   4. すこしうれしい
   5. ほとんど何も感じない
6. 何かでいらいらするとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少しいらいらする
   3. いらいらする
   4. とてもいらいらする
   5. 身体が緊張して力が入るほど非常にいらいらする

7. 得意なスポーツで自己ベスト記録を出せたとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少しうれしい
   3. うれしい
   4. とてもうれしい
   5. 有頂天になるほど非常にうれしい
8. したり言ったりすべきでないことをしたり言ったりしたとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し気がとがめる
   3. 気がとがめる
   4. とても気がとがめる
   5. 非常に気がとがめる
9. 仲の良い子どもと一緒に公園にいるとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し陽気になる
   3. 陽気になる
   4. とても陽気になる
   5. 公園を駆け回りたいほど非常に陽気になる
10. 誰かが私を批判したとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少しむっとする
   3. 腹が立つ
   4. とても腹が立つ
   5. 涙が出るほど非常に腹が立つ
11. 好きな先生からほめられたとき、私は
   1. とびあがるほど非常にうれしい
   2. とてもうれしい
   3. うれしい
   4. 少しうれしい
   5. ほとんど何も感じない
12. 人からいらいらすることをされたとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少しいらいらする
   3. いらいらする
   4. とてもいらいらする
   5. 叩きたくなるほど非常にいらいらする
13. 尊敬するリーダーの話を聞いたとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し感銘を受ける
   3. 感銘を受ける
   4. とても感銘を受ける
   5. 新しい目的意識を見出すほど非常に感銘を受ける
14. 恥ずかしい経験をしたとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し恥ずかしい
   3. 恥ずかしい
   4. とても恥ずかしい
   5. 消えてしまいたくなるほど非常に恥ずかしい
15. 知り合いが失礼なふるまいをしたとき、私は
   1. 泣き出したいほど非常に傷つけられる
   2. とても傷つけられる
   3. 傷つけられる
   4. 少し傷つけられる
   5. ほとんど何も感じない
16. 楽しいパーティーに参加したとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し陽気になる
   3. 陽気になる
   4. とても陽気になる
   5. 生まれ変わったかのように非常に陽気になる
17. すばらしい出来事が起こったとき、私は
   1. 有頂天になるほど非常にうれしい
   2. とてもうれしい
   3. うれしい
   4. 少しうれしい
   5. ほとんど何も感じない
18. 悲しい映画を見たとき、私は
   1. 涙が出るほど非常に悲しい
   2. とても悲しい
   3. 悲しい
   4. 少し悲しい
   5. ほとんど何も感じない
19. 何か大きなことを成し遂げたとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し満足する
   3. 満足する
   4. とても満足する
   5. 人生全てが価値あるものであるかのように非常に満足する
20. 何かに対して怒るとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し怒る
   3. 怒る
   4. とても怒る
   5. 爆発するほど非常に怒る
21. 付き合っている人が素敵な夕食を用意してくれたとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少しロマンチックだと感じる
   3. ロマンチックだと感じる
   4. とてもロマンチックだと感じる
   5. 他の何事にも代えがたいほど非常にロマンチックに感じる
22. 誰かの気持ちを傷つけてしまったとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し申し訳なく思う
   3. 申し訳なく思う
   4. とても申し訳なく思う
   5. 償えることがあれば何でもしようと思うほど非常に申し訳なく思う
23. 仕事や学校に遅れそうなのに交通渋滞に巻き込まれたとき、私は
   1. 激怒する
   2. とても怒る
   3. 怒る
   4. 少し怒る
   5. ほとんど何も感じない
24. 大事な試験や就職面接などうまくやらなければいけない状況にあるとき、私は
   1. ほとんど何も感じない
   2. 少し不安だ
   3. 不安だ
   4. とても不安だ
   5. 他に何も考えられないほど非常に不安だ

25. 思いがけなく上司から「良い仕事をした」とほめられたとき、私は
    1. その日一日が最高だと思うほど非常に満足する
    2. とても満足する
    3. 満足する
    4. 少し満足する
    5. ほとんど何も感じない
26. 恋愛をしているとき、私は
    1. 他に何も考えられないほど非常に情熱的だ
    2. とても情熱的だ
    3. 情熱的だ
    4. 少し情熱的だ
    5. ほとんど何も感じない
27. 顔見知り程度の知人のお葬式に参列したとき、私は
    1. ほとんど何も感じない
    2. 少し悲しい
    3. 悲しい
    4. とても悲しい
    5. 涙を抑えきれないほど非常に悲しい
28. 人と口げんかするとき、私は
    1. ほとんど何も感じない
    2. 少し怒る
    3. 怒る
    4. とても怒る
    5. 落ち着いていられないほど非常に怒る
29. 請求書の支払い期限が過ぎているとき、私は
    1. 他に何も考えられないほど非常に心配だ
    2. とても心配だ
    3. 心配だ
    4. 少し心配だ
    5. ほとんど何も感じない
30. 思いがけなく誰かがプレゼントをくれたとき、私は
    1. ほとんど何も感じない
    2. 少しうれしい
    3. うれしい
    4. とてもうれしい
    5. 駆け出してお返しのプレゼントを買ってきたくなるほど非常にうれしい

Development of the Emotional Intensity Scale: Japanese Version

Motoko NOGUCHI (*Graduate School of Education, Kyoto University*)
Wataru SATO (*Primate Research Institute, Kyoto University*)
Sakiko YOSHIKAWA (*Kokoro Research Center, Kyoto University*)

Emotional intensity is defined as the personality trait of the typical intensity with which individuals experience their emotions. Bachorowski & Braaten (1994) has developed the Emotional Intensity Scale (EIS) to measure the emotional intensity for English speakers. In this study, we developed the Japanese version of EIS and examined the reliability and the validity in a Japanese sample. We measured the other scales of relevant personality traits (State-Trait Anxiety Inventory: STAI, Questionnaire Measures of Emotional Empathy: QMEE, Interpersonal Reactivity Index: IRI). EIS total score, positive emotion item score (EIS-POS), negative emotion item score (EIS-NEG), and these correlations and gender differences were similar to those of the original version. The high internal reliability of the EIS was obtained. The EIS-NEG was positively correlated with the STAI trait anxiety score. The EIS total score, EIS-POS, and EIS-NEG were positively correlated with the QMEE score and the emotional empathy scores of the IRI sub-scales. These results suggest that the Japanese version of EIS is available as the measure of emotional intensity.

Keywords: emotional intensity, trait anxiety, emotional empathy.